

第1章 天草における言語接触とキリシタン関係訳語

——天草版『羅葡日対訳辞書』を中心に

韓 一 瑾

はじめに

1591年（天正19）から1597年（慶長2）にかけての約7年間、天草コレジヨは宣教師を養成する教育が行われる一方、日本初のゲーテンベルク印刷機により、「キリシタン版天草本」を出版した。現在残されているのは「平家物語」、「伊曾保物語」など12種しかないが、「キリシタン版」資料として、近代日本の文化交流史や国語史に多大な影響を与えた。

そのなかで、1595年（文禄4）に刊行された『羅葡日対訳辞書』¹⁾が大航海時代における東西文化交渉の成果であり、国語史においても重要な位置を占めてきた。土井忠生が『吉利支丹語学の研究』²⁾において「イエズス会士の日本語学は国語史の研究資料として最も高い価値を備えている」と指摘したように、『羅葡日対訳辞書』の分析を通じて、辞書を編纂する過程において、日本語が異なった言語との接触によってどのような問題を生じたのか、外来用語がどのように受容されたのかなどを解明することができるだろう。

第一章 『羅葡日対訳辞書』について

キリシタン版『羅葡日対訳辞書』の原本は、以下の7点が存在する。³⁾

- 1 オックスフォード大学ボドレイアン図書館 (Bodleian Library) 蔵本
- 2 フランス学士院図書館 (Bibliothèque de l'Institut de France) 蔵本
- 3 ライデン大学図書館 (Universiteitsbibliotheek Leiden) 蔵本
- 4 ロンドン大学東洋アフリカ学研究院図書館 (School of Oriental and African Studies library, University of London) 蔵本
- 5 北京北堂文庫蔵本 (a)
- 6 北京北堂文庫蔵本 (b)

1) 『ラ=ポ=日対訳辞書』とも呼ばれる。本文では、『羅葡日対訳辞書』と表記する。

2) 土井忠生『吉利支丹語学の研究』靖文社 1942年

3) 先行研究により、『羅葡日対訳辞書』の伝本は七つがあることがわかるが、図書館の名前の表述が若干違う所がある。本文は岸本恵実の表述を引用した。

7 (旧) レニングラード国立大学図書館蔵本

複製の資料としては、北京北堂文庫蔵本を底本としての『吉利支丹版 拉葡日対訳辞書』（東洋文庫 1951年）とオックスフォード大学ボドレイアン図書館蔵本を108%に拡大して複製した『羅葡日対訳辞書』（勉誠社 1979年）がある。その他、島正三が日本語をアルファベット順にした逆引きの『吉利支丹版羅葡日対訳辞書備考 I・II』（文化書房 1962年、1964年）がある。序言によると、著者は天草版羅葡日対訳辞書の日本語索引を作成したいが、形式的には日本語と原典に見られる標出語としてのラテン語を抜き出し、それを対訳ふうに掲げて、日羅辞書の形式を兼ねることにしたようである。金沢大学法文学部国文学研究室編『ラホ日辞典の日本語』本文篇（全七冊 1967年-1969年）と索引（全四冊 1971年-1973年）は、大見出しのラテン語と日本語のみの本文篇と日本語の索引からなる。この資料により、各語句に用法や言い換えを見ることができる。以上のような研究資料を利用し、『羅葡日対訳辞書』をより詳しく研究することができる。

この辞書のラテン語書名は DICTIONARIFVM/ LATION LVSITANICM, AC/ IAPONICVM EX AMBROSII CALE/pini volumine depromptum: in quo omiſſis no/minibus proprijs tam locorum, quàm homi/num, ac quibuſdam alijs minus vſitatis, omnes vocabulorū/ſignificationes, elegantioresq; dicendi modi apponuntur:/in vſum, & gratiam laponicæ iuuentutis, quæ Latino idiomatiſſime ope/ram nauat, nec non Eropeorū/ sermonem addiſcunt./⁴⁾である。この非常に詳しい書名は辞書の底本、性質、特色、対象などについて説明した。特に、「ラテン語の慣用を熱心に学ぶ日本の若者ばかりでなく、日本の言葉を更に学ぼうとするヨーロッパ人たちにも利用され、恩恵を与えるのである。」⁵⁾と書かれたように、本辞書は外国語を勉強する人のために、編纂したものである。当時、ラテン語を勉強する目的はキリスト教を信仰するためであり、宣教師は日本語を勉強する目的も布教のためであろう。したがって、編纂した時、キリスト教用語の翻訳に工夫が施されたと類推できる。

書名の下に刊記があり、その中の「IN AMACVSA IN COLLEGIO」により、当辞書が天草のコレジオにおいて印刷されたことが確認できる。当辞書の具体的な内容は、標題紙や序言、本文、補遺、正誤表など五つの部分で構成され、合わせて456葉である。序言は「読者へ」と「凡例」で構成されている。序言によると、本書はアンブロジオ・カレピーノ (Ambrogio Calepino.)⁶⁾のラテン語辞書をもとにした。

『羅葡日対訳辞書』についての先行研究は3つの問題に注目していた。第1は原典との対照研究である。この対照を通じ、ラテン語からポルトガル語と日本語に訳した際、原典のラテン語語釈がどのように翻訳された、ポルトガル語訳と日本語訳の相互関係などを解明した。その上、版本間の刷りの違いや版本と写本の違いなどの研究も進めてきた。第2は『羅葡日対訳辞書』の語彙に意味分類を行い、各分野の意味を検討することである。松岡洸司は時間、色彩、職業など10種類に分けて各分野の語彙を検討した。第3は『羅葡日対訳辞書』により、日本語の古音を研究した先行研究もある。『羅葡日対訳辞書』

4) 「/」は原文の改行を示している。キャピタルレターとスモールレターの使いや句読点が原文と一致する。

5) この書名の訳文は『羅葡日対訳辞書』（1979年 勉誠社）巻末に掲載された福島邦道の解題を参照した。

6) アンブロジオ・カレピーノはイタリアで最初の辞書編纂者の一人で、彼の名前は後に辞書の代名詞として一般的に用いられてきた。

の日本語がすべてローマ字で表記されたので、当時の日本語の発音を再現することができ、音声研究にとって貴重な資料である。

しかし、『羅葡日対訳辞書』の中の学術用語についての研究は未だ開拓されていない分野である。この辞書の学術用語が数量上で考えると確かに多くないが、近代日本語の形成に多大な影響を与えた。特に、キリシタン関係の宗教用語が当時から日本に伝えられ、どのような形で日本社会に受容されたのかを解明するためには、極めて重要な研究資料だ。したがって、今回はキリシタン関係訳語という角度から『羅葡日対訳辞書』を研究したい。

第二章 『羅葡日対訳辞書』のキリシタン関係訳語について

本辞書は宣教のために編纂したものである。しかし、当時の日本人はキリスト教に関わる知識が不足しているため、宗教関係の用語の翻訳が非常に難しかった。キリスト教の概念をどのように日本の人々に伝えるのか、当時使える方法は近代日本語にどのような影響を与えるのか。この問題を明らかにするため、『羅葡日対訳辞書』のキリスト教に関わる訳語を精査したい。今回は『羅葡日対訳辞書』に収録されているすべてのキリスト関係用語をピックアップし、そのラテン語原文と日本語の対訳の対照に通じ、当時のキリスト関係用語がどのように翻訳されたのかを解明する。

具体的な研究方法としては、まず、『羅葡日対訳辞書』に収録されている見出しのラテン語の意味を『羅和辞典』⁷⁾で確認し、キリシタン関係の用語を選定した。その上、選定したラテン語の『羅葡日対訳辞書』に見られる当時の訳語と、『羅和辞典』で見られる現代日本語の訳語を調べた。『羅葡日対訳辞書』の日本語はローマ字で表記したため、『ラホ日辞典の日本語 索引』を参照しながら、日本語に書き換えた。なお、ラテン語の意味を確認する時、『羅和辞典』でキリシタン関係用語と示したが、『羅葡日対訳辞書』において他の語彙解釈を収録した場合、本文の単語表に収録しない。当時はまだキリシタン関係用語ではないか、日本の社会においてキリシタン関係用語と認めなかったからである。

統計によると、『羅葡日対訳辞書』に見られるキリシタン関係用語は75点があり、詳しくは付録1を参照されたい。統計データによると、当時の翻訳は以下の4つの方法がある。

1 漢語に訳する

キリシタン用語を訳した場合、以下の漢語を使った⁸⁾。漢語の大部分が仏教用語であることが分かった。
住持 住持職 礼拝 礼 内神 仏殿 宝殿 寺 礼拝堂 天主堂 天 風大 大空
仏供 仏餉 御供 使者 天主 聖人 御恩 恩賞 善徳 供養 幡物 尊体 堂 天道 天尊 天帝
天狗 天魔 談義者 御計 御定 談義 拜趨 比丘尼 地獄 十箇条 山居人 御内証

7) 『羅和辞典』改訂版 研究社 2009年

8) 音読みのサ変動詞を使う場合、漢語と認める。

2 和語に訳する

キリシタン用語を訳した場合、以下の和語を使った。数が少なく、主に動詞である。

拝む 使 洗ふ 手向くる 捧ぐる 磔

3 外来語を借用する

キリシタン用語を訳した場合、以下のラテン語をそのまま使った。カタカナで表記されなかったが、外来の概念を訳せず、直接に借りるという点から見ると、現代の外来語とほぼ同じである。

Ecclesia Christam Anjo Baptismo Deus Sanctos Fides Cruz Iesu Evangelho Spiritusancto

4 意味をフレーズや句で解釈する

キリシタン用語を訳した場合、以下のフレーズや句を使って解釈した。これが本書においては一番多く使われた翻訳方法であることが分かった。

衆僧の司 衆僧の司の位 右の司の住居為らるるところ 比丘尼の司 焼香を為て祈念する 御戸の内
寺の役者 行手向を成す壇 天の使 智慧の体 智慧分別の霊体 比丘尼の司 我が大将を背き捨つる
門派を翻す 遣はされたる者 行の壇 水を注ぐ道具 尊きこと 崇め敬はるべきこと その外の尊き
事へ対しての悪口 我等を責め苦しむ程のこと 御掟の条 寺に掛け置く捧げるもの 地獄の川 仏神
を拝む 仏神を拝む者 仏神を礼拝 寺の勤めをする位に人を上ぐる 御奉公に対して呵責を受け、命を
掲げられたる善人 山居人の集まり 寺の道具を取り扱ふ役者 殿堂の奥に壇上を構置くところ 天主
の御ことについての学問

その他、外来語を使う説明文もある。例えば「Christam (キリシタン)⁹⁾ になるべき者に言葉を以て後生の道を教ふることを言う」、「Ecclesia (教会) の功力を被らず、Christam (キリシタン) 衆の参会より罰する」などである。キリシタン教の本質的な概念がラテン語で表記されるキーワードと理解しやすい日本語を組み合わせることで表現された。

第三章 16世紀のキリシタン関係訳語の特徴

1 仏教語の多用

『羅葡日対訳辞書』の序言には「この辞書にはすべての語彙の意味と奇麗な文章、言い方、優雅な訳がなされている」と書いている。その「優雅な訳」とは、どういう意味であろう。当時の言語審美意識では、最も「優雅」な言語形式は「漢文」であろう。従って、より「上品」なイメージを持っている仏教語を借りて訳したのが一定の合理性があると思う。しかし、仏教語を大量に使うなら、誤解を起りやすいので、編纂者はキリシタン関係訳語を訳した際、仏教の概念を援用したが、宗教の本体の「仏」や「神」、「DEUS」を区別する傾向がある。例えば、基本的にキリシタンに関わる場所は「寺」、人は

9) () は筆者注。

「僧」に訳した。そして、キリシタンの抽象的な概念や教義を表すために、仏語の「風大」¹⁰⁾ や「六根」¹¹⁾ などを直接的に借りた。ただ、「Deus」の訳語としては「天道」、「天主」、「天尊」、「天帝」を使い、「異教徒」を「仏神を拝む人」と訳され、仏神と Deus を対立する意識があるのではないか。

2 訳語の未定着

当時、西洋から伝えられた新概念に対する定着な訳語がなかったため、いろいろな言い方を挙げた。これはこの辞書の一つの特徴となっている。例えば、「神殿」を「寺」や「宝殿」、「礼拜堂」、「天主堂」など4つの訳語をあげ、「Deus」も「天道」、「天主」、「天尊」、「天帝」など四つの訳語を提供された。また、日本語に翻訳しなかった語もあり、ラテン原語をそのまま使い、本質的な意味を保った。例えば、「教会」、「キリシタン」、「天使」、「洗礼」、「信仰」などを表す時、ラテン語原語を使った。これが現代日本語に於いて多数存在されている外来語の原形だと思ふ。しかも、現代日本語のキリシタン関係専門用語の中、英語ではなく、ラテン語やポルトガル語出典の外来語が少なくないのは、キリシタン用語は日本に伝えられたルートが英語書籍ではなく、ラテンやポルトガル書籍であるのがもう一つの証拠である。

その多様な訳語の中、近代日本語に受容された語と受容されなかった語があるが、易しい漢字を組み合わせて新語を創出する造語方法と本質を保つために原語を使うという表現手段が、その後の外国語書籍の翻訳と外国語辞典の編纂に大きく影響した。

3 造語要素の未形成

近代日本語における新しい学術用語の特徴といえ、造語要素を使って新語を創出することである。そして、この特徴が20世紀以降、日本書籍が中国に伝えた過程において、中国語にも影響を与えた。しかし、その近代日本語における造語要素の形成時期は未だ明確ではなかった。今回の天草版『羅葡日対訳辞書』に見られるキリシタン関係用語の分析を通じて、16世紀においてその造語要素が未だ形成されなかったことがわかる。例えば、「一学」は「…の学問」、「一院」は「…の集まり」などで訳された。従って、この辞書の単語の翻訳は「訳語」というより「訳文」である。この長い説明文で単語を訳す方法はその後長崎で出版された「葡日辞書」においても踏襲された。つまり、造語要素の形成がその後の蘭学の勃興と関係があるのだろう。

おわりに

本稿は天草版『羅葡日対訳辞書』に見られるキリシタン関係訳語の特徴を述べた。当時、日本においては近代学術用語が未だ形成されなかったが、訳者が外来の概念を表すために試行錯誤を繰り返したことが分かった。また、本書に収録された訳語の中に、すでに現代日本語として受容された単語も存在し

10) 仏語。一般には地、水、火とともに説かれる四大の一つ。『日本国語大辞典』を参照。

11) 仏語。心的作用にはたらく6つの器官。対象（六境）に応じた認識思惟の作用（六識）のそれぞれの拠り所である器官。眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根の6つ。『日本国語大辞典』を参照。

たので、近代日本語の形成に影響を与えた。今後は天草版『羅葡日対訳辞書』に見られる哲学用語や医学用語などを中心に、『羅葡日対訳辞書』研究の新たな展開をしたい。

参考文献

- 吉利支丹語学の研究 土井忠生 靖文社 1942年
 吉利支丹版羅葡日対訳辞書備考Ⅰ 島正三 文化書房 1962年
 吉利支丹版羅葡日対訳辞書備考Ⅱ 島正三 文化書房 1964年
 ラホ日辞典の日本語 本文篇 全七冊 金沢大学法文学部国文学研究室 ラホ日辞書索引刊行会 1967年-1969年
 ラホ日辞典の日本語 索引 全四冊 金沢大学法文学部国文学研究室 ラホ日辞書索引刊行会 1971年-1973年
 キリシタン資料と国語研究 福島邦道 笠間書院 1973年
 羅葡日対訳辞書 福島邦道 三橋健解題 勉誠社 1979年
 キリシタン語学——16世紀における 松岡洸司 ゆまに書房 1991年
 キリシタン版『羅葡日対訳辞書』諸本の書き入れについて 岸本恵実 日本語・日本文化 第28号 123-135 2002年

付録1 『羅葡日対訳辞書』のキリシタン関係訳語¹²⁾

| 番号 | ラテン語 | 羅葡日対訳辞書の訳語 | 現代日本語の訳語 |
|----|--------------|---|------------------------|
| 1 | Abbas | 衆僧の司 あるいは住持 | 大修道院長 |
| 2 | Abbatia | 住持職 衆僧の司の位 右の司の住居為らるるところ | 大修道院 |
| 3 | Abbatissa | 比丘尼の司 | 女子大修道院長 |
| 4 | Adoleo | 焼香を為て祈念する | 礼拝する |
| 5 | Adoratio | 礼拝 礼 | 崇拜, 崇敬 |
| 6 | adoro | 拝む 礼拝する | 崇拜する |
| 7 | Adytum | 内神 仏殿 宝殿 | 至聖所 聖域 |
| 8 | Aedes | 寺 宝殿 礼拝堂 天主堂 | 神殿 |
| 9 | Aedicula | 宝殿 御戸の内 | 小神殿 |
| 10 | Aeditimus | 寺の役者 | 神殿の番人 |
| 11 | Aedituus | 寺の役者 | 神殿の番人 |
| 12 | Aether | 天 風大 大空 | エーテル《古代人が考えた上天にみなぎる精気》 |
| 13 | Altäre | 行手向を成す壇 | 祭壇 |
| 14 | Ambrosia | 仏供 仏餉 御供 | 神々の食物 |
| 15 | Anathema | Ecclesia(教会)の功力を被らず、Christam(キリシタン)衆の参会より fuxxeraruru 折檻をいう | 【カトリック】破門 |
| 16 | Anathematizo | Ecclesia(教会)の功力を被らず、Christam(キリシタン)衆の参会より罰する | 破門する |
| 17 | Angelus | 使 天の使(anjo) | 天使 |
| 18 | Anima | 智慧の体 | (肉体を離れた)霊 |
| 19 | Animus | 智慧分別の霊体 | 精神 |
| 20 | Antistes | 出家の司 | 祭司 司教 |

12) () は筆者注である。以下の () の中の内容がすべて筆者注である。

第1章 天草における言語接触とキリシタン関係訳語（韓）

| | | | |
|----|--------------|---|------------------------|
| 21 | Antistita | 比丘尼の司 住持 | (女性の) 神殿管理人 神官 |
| 22 | Apostasia | 我が大将を背き捨つることを言う あるいは我が宗体、門派を翻す | 背教 棄教 |
| 23 | Apostata | 我が大将を背き捨つるもの あるいは我が宗体、門派を翻す | 背教 [棄教] 者 |
| 24 | Apostolus | 使 使者 遣はされたる者 | 使徒 |
| 25 | Ara | 行の壇 | 祭壇 |
| 26 | Aspergillum | 水を注ぐ道具 | 【カトリック】 灌水器, (聖水の) 撒水器 |
| 27 | Augustus | 尊きこと 崇め敬はるべきこと | 神々しい, 神聖な |
| 28 | Baptisma | Baptismo (洗礼) の授 | 【キリスト教】 洗礼 |
| 29 | Baptizo | 洗ふ Baptismo (洗礼) を授來る | 洗礼を授ける |
| 30 | Blasphemia | 天主 聖人 Deus, Sanctos その外の尊き事へ対しての悪口 雑言 | 冒瀆 |
| 31 | Blasphemo | 天主 聖人 Deus, Sanctos その外の尊き事へ対して悪口 雑言する | 冒瀆する |
| 32 | Catechesis | Christam (キリシタン) になるべき者に言葉を以て後生の道を教ふることを言う | 【キリスト教】 教理口授 |
| 33 | Catechumenus | Christam (キリシタン) になるために fides (信仰・信徳) のことを聴聞する衆 | 【キリスト教】 公教要理受講者 |
| 34 | Cella | 宝殿 | (神殿の) 神像安置所 |
| 35 | Charisma | 御恩 恩賞 善徳 | 聖霊の賜物 |
| 36 | Clerus | 讓 | 聖職者 (階級) |
| 37 | Coenobita | 出家 | (共住) 修道士 |
| 38 | Coenobium | 出家 数多集まりて居る寺 | 修道院 |
| 39 | Consecratiō | 供養 捧ぐることなり あるいは 手向くることなり | 聖別 |
| 40 | Consecro | 供養ずる 手向くる 捧ぐる | 聖別する |
| 41 | Corporale | 色相あるもの あるいは 六根に触れ覚ゆる体あるもの sititai に あたること。 | 【カトリック】 聖体布 |
| 42 | Cruciarus | 磔に掛られるべき者 | 十字架にかけられた人 |
| 43 | Crucifigo | Cruz (十字架) あるいは、磔に掛くる | 十字架につける |
| 44 | Crux | 幡物、我等を責め苦しむ程のこと | 十字架 |
| 45 | Decalogus | 十箇条 御掟の条 | 【キリスト教】 モーセの十戒 |
| 46 | Deitas | Deus の尊体 | 神性 |
| 47 | Delubrum | 堂 寺 | 神殿, 聖域 |
| 48 | Deus | 天道 天主 天尊 天帝 | 神 造物主 天主 |
| 49 | Diabolus | 天狗 天魔 | 悪魔 |
| 50 | Divinitas | Deus の尊体 | 神性 |
| 51 | Divinus | 尊きこと あるいは Deus ことにあたる | 神の, 神に属する |
| 52 | Divus | 尊きこと Deus ことにあたる | 神の |
| 53 | Donaria | 堂 寺に掛け置く捧げるもの | 祭壇 |
| 54 | Ecclesia | 一世界に繁栄したる Christan のことをいう | 教会 |
| 55 | Ecclesiastes | 談義者 | 伝道の手紙 |
| 56 | Erebus | 地獄の川 | 冥界 |
| 57 | Ethnicus | Christan に有らず 仏神を拜む衆 | 異教徒 |
| 58 | Evangelium | Iesu Christo の evangelho (福音書) のことをいう | 福音; 福音書 |

| | | | |
|----|-------------|-------------------------------------|----------|
| 59 | Fanum | 寺 堂 | 聖域, 神殿 |
| 60 | Fatum | Deus の御計 御定 | 神意, 天命 |
| 61 | Hagiographa | Christo の信すべきために Spiritusancto より句句 | 【聖書】 聖文学 |
| 62 | Homilia | 談義 | 説教 |
| 63 | Idololatra | 仏神を拝む者 | 異教徒 |
| 64 | Idololatra | 仏神を礼拝、拝趨 | 異教徒 |
| 65 | Incestus | 比丘尼 | 神聖をけがす |
| 66 | Inferi | 地獄 | 冥界 |
| 67 | Initio | 寺の勤めをする位に人を上ぐる | 奥義を伝える |
| 68 | Martyr | Deus の御奉公に対して呵責を受け、命を掲げられたる善人 | 殉教者 |
| 69 | Martyrium | Deus の御奉公に対して呵責を受け、命を掲げたることを言う | 殉教 |
| 70 | Monachium | 山居人の集まり、あるいは出家の集まり | 修道院 |
| 71 | Monachus | 出家 山居人 | 修道士 |
| 72 | Mystagogus | 寺の道具を取り扱ふ役者 | 秘儀伝授者 |
| 73 | Numen | Deus の御内証 | 神意 |
| 74 | Sacellum | 殿堂の奥に壇上を構置くところ | 礼拝所, 聖堂, |
| 75 | Theologia | 天主の (Deus の) 御ことについての学問 | 神学 |